

令和元年6月5日現在

機関番号：12606

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K16644

研究課題名(和文)鎌倉時代彫刻史における京都仏師の造像ネットワークに関する研究

研究課題名(英文) Study of the activities of Kyoto Busshi in the history of the Buddhist Sculptures in the Kamakura Period

研究代表者

佐々木 あすか (SASAKI, Asuka)

東京藝術大学・大学院美術研究科・研究員

研究者番号：80620757

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、在銘像が乏しく、いまだ不明な点の多い京都仏師(院派、円派)の鎌倉時代前期における造像活動と新形式、新様式の展開を明らかにすることを目的としたものである。これまでの当方の着衣形式の研究から、京都仏師またはその周辺作とみられる作品群を対象とした。研究の成果として、これらの作品群の着衣、髻などの細部形式に認められる共通性から、各地に点在する作品群が共有する一定の造像の型の存在を想定することができた。それと同時に、前代にあたる平安時代後期、あるいは奈良仏師・慶派仏師の典型形式とは異なる新形式が各地に広まる様子を、実作品に即して跡づけることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究で取り扱った作品群は、平安時代後期の仏像とも、奈良仏師・慶派仏師の仏像とも異なる新形式を備えており、奈良仏師・慶派仏師とは異なる鎌倉時代前期における新しい試みとして捉えることができる。これにより、今後、奈良仏師・慶派仏師作例との比較も可能となるものと予想され、京都仏師と奈良仏師・慶派仏師作例をより重層的に捉えることも可能になると考える。また、本研究で検討した髻、着衣などの細部形式は、仏像のなかではわずかな部分に過ぎないが、制作時期、仏師系統に適した形状を提示することが可能であり、文化財修復における補作などに寄与できるものと考えられる。

研究成果の概要(英文)：In the Kamakura period, Kyoto Busshi (Inpa School and Enpa School Sculptors) based their activities in Kyoto. There are a few extant Buddhist sculptures created by Kyoto Busshi in the Early Kamakura period, so the activities of Kyoto Busshi are not so known. This study attempted to follow their activities, and the influences of the new forms and the new styles, focusing on the Buddhist sculptures which presuming to be created by Kyoto Busshi or their peripheral sculptors based on my studies on the forms of the garments. These works scattered in Kinki, Shikoku and Tohoku region were found to have commonality in the forms such as the coiffures and the garments. From this, it was possible to recognize the existence of the rules of the forms shared by these works. Studying these Buddhist sculptures, it was revealed to the aspects how the new forms, which were different from the typical forms of the Late Heian period or Nara Busshi School and Keiha School, influenced the various places.

研究分野：美術史

キーワード：日本彫刻史 仏像 細部形式 平泉 中尊寺

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

平安時代後期、12世紀の彫刻史は、11世紀に活躍した定朝の仏像が強い規範となり、比較的様式変化が乏しい時代とされる。そうしたなかで、鎌倉新様式を確立したとされる運慶らの作例にみられる新しい要素は、すでに12世紀半ばの運慶をさかのぼる系統の奈良仏師作例に認められることが指摘されてきた。こうした動向から、12世紀後半に都を中心に活躍した中央仏師は、なおも定朝様を遵守する保守的な京都仏師(院派・円派)と、鎌倉新様式へと向かう革新的な奈良仏師(慶派仏師)として、対比的に捉えられる傾向がある。

京都仏師のうち院派については、先学による研究があるものの、京都仏師の作例は遺品、基準作の少なさから個別の作品研究、あるいは簡略な言及に留まり、仏師系統ごとの展開や影響関係を考慮しながら鎌倉彫刻史に位置づけることはむずかしい状況にある。また、こうした京都仏師作例の遺品、基準作の少なさゆえに、京都を中心とした近畿地方をおもな考察対象とする傾向があった。

2. 研究の目的

本研究は、平安時代後期から鎌倉時代前期に活躍した中央仏師(院派、円派、奈良仏師〔慶派仏師〕)のうち、いまだ不明な点の多い京都仏師(院派、円派)の鎌倉時代前期における造像活動と新形式、新様式の展開を明らかにすることを目的とする。平安時代から鎌倉時代への転換期にあたる12世紀後半は、ひとつの単純な様式展開として把握することはむずかしいと言える。多様な様相を示す12世紀後半の彫刻史を体系的に理解するためには、仏師系統ごと(院派・円派・奈良仏師〔慶派仏師〕)にその展開を理解する必要があると考える。

これまでの当方の研究において、仏像のうち菩薩形・明王坐像にあらわされる裾・腰布の着衣形式の体系化をおこなってきた。そのなかで、11世紀後半～12世紀の典型「平安時代後期の形式」と、12世紀後半～13世紀第1四半期の典型「奈良仏師作例の形式」を規定したことにより、どちらにも分類できない新たな一群を「折衷型」として定義した。この「折衷型」の作例は、奈良仏師・慶派仏師作例の形式と異なることから、作者は奈良仏師・慶派仏師以外、特に京都仏師の作を含むものと推定し、すでに学術論文として発表している。

ところで、運慶を中心とした奈良仏師・慶派仏師研究では、東国に残る運慶弟子筋などの作品研究が進んでいる。その一方で京都仏師研究においては、遺品の少なさから正系仏師だけではなく、その周辺作もいまだ未解明な点が多いのが現状である。本研究では、基準作の少ない京都仏師研究を進展させる一手段として、研究対象、範囲を拡大し、周辺作の検討を進めることを試みた。その手段として、上記に述べた「折衷型」の作例(以下、「折衷型」作品群と称する)に注目する。「折衷型」作品群は、現在近畿地方のほか四国、伊豆半島、東北地方など各地に点在している。本研究では研究対象を近畿地方以外の全国に拡大し、京都仏師の地方での造像の可能性の検討、京都仏師と地方との造像ネットワークの解明、そして新形式・新様式の伝播の様相を具体的に明らかにすることを目指し、最終的には鎌倉時代前期彫刻史に位置づけることを目的とした。

3. 研究の方法

本研究では、上記「研究の目的」項に記したように、これまでの当方の研究によって菩薩形・明王坐像における裾・腰布の着衣形式が「折衷型」と判断された作例を研究対象とした。これまでは、着衣形式の体系化と個別の作品分析から、新たな京都仏師あるいは周辺作の提示をおこなってきたが、本研究では「折衷型」作品を一つのグループとして比較研究をおこなうことで、京都仏師の動向を明らかにしようとするものである。その研究方法は、実地調査・熟覧に基づく作品研究と、史料の検討による造像背景、伝来の考察から成る。

作品研究では、これまでに未見の作例や資料収集の不十分な作例を中心に実地調査、見学をおこなった。調査では細部の形状を把握するための熟覧と、全方向からの検討をおこなうための多方向からの写真撮影をおこない、基礎資料の収集に努めた。実地調査や収集した写真資料に基づき、頭頂で髪をまとめた髻、頭部にあらわされる天冠台、上半身にまとう条帛などの細部形式の検討、比較をおこない、「折衷型」作品群に共通する形式を抽出した。

造像背景、伝来の考察については、一次史料の確認、当該地の支配関係やほかの造像の状況について考察を進めた。一次史料や中世の史料が見だしにくい作例については、近世の地誌の収集や、近代の宝物調査関連史料の閲覧、写真撮影をおこない援用した。

4. 研究成果

本研究をおこなうにあたり、裾・腰布の着衣形式において「折衷型」を示す作品群の資料収集、各地に点在する「折衷型」作品群を相互に比較し、そこに共通する形式上の特徴を見出すことを全期間を通じて継続した。本研究でのおもな成果は下記のとおりである。

(1) 「折衷型」作品群の増補

着衣形式において「折衷型」を示す作品群として、当初は13件21軀を対象としていた。本

研究期間中の資料収集、実地調査の結果、さらに3件の「折衷型」作品を加えることができた。

特に、これまで写真資料や論文が乏しく詳細が不明であった滋賀県観音寺聖観音菩薩坐像の調査をおこない、熟覧の結果「折衷型」作品と判断した。観音寺像は亡失していると思われた部材の大半が別保管されており、当初の姿の復元が可能であることが判明した。これまでのわずかな作品解説において都ぶりの作風を示すことが指摘されていたが、細部形式の観点から、京都仏師周辺作の可能性が高い作例として今回新たに加えることができた。また、伝来については一次史料を欠くものの、滋賀県庁県政史料室において明治期の宝物調査関連史料を閲覧し、現在の聖観音菩薩坐像、不動明王立像、毘沙門天立像3軀の存在を確認した。

このほかに、2018年度に重要文化財に指定された岩手県東川院観音菩薩坐像や、岩手県二十五菩薩堂二十五菩薩像(亡失部の多い像や断片のみのもも含んだ坐像のすべて〔跪坐像4軀は除く〕)も、実見の結果「折衷型」と判断した。

(2) 細部形式の造像の型の存在

「折衷型」作品群において、裙・腰布の着衣形式のほか、髻、天冠台、条帛などの細部形式について、それぞれどのような特徴を示すかを整理・分類し、「折衷型」作品相互の細部形式の比較をおこなった。その結果、「折衷型」作品群には形式上の共通性が認められ、これらの作品群が共有する造像の一定の“型”の存在が想定できた。このことは、「折衷型」作品群が各地で単発的に造像されたものではないことを示す結果と言える。

例えば髻については、像によって髻の形状や構成自体が異なるものもあり、非常に細かい部分ではヴァリエーションが多いものの、先端を巻く髪束を正面あるいは側面に配す点や、平安時代後期に典型的ないわゆる垂髻に近い形状ながらも、上段の髪束の一部が省略されるなどの共通項が認められた。そしてこれらは平安時代後期の典型形式とも、奈良仏師・慶派仏師の典型形式とも異なることが明らかとなり、「折衷型」作品群が共有する新しい形式上の特徴と捉えることができた。

また、「折衷型」作品群に特有の形式を明らかにするために、同時代の奈良仏師・慶派仏師の細部形式についても検討を進め、学術論文 にまとめた。

(3) 平泉での「折衷型」作品の広まり

本研究では、「折衷型」作品群が平泉や高野山周辺に多く分布することに注目した。これまで「折衷型」と確認していた中尊寺一字金輪像、瑠璃光院大日如来像に加え、先述の東川院聖観音菩薩像、二十五菩薩堂二十五菩薩像などを作品群に加えることができた。また、例えば裙・腰布の着衣形式のうち、一つの区画に配される衣文線の方向などといった細かい点において、平泉周辺作例ではほぼ一致するのに対し、他地域では一致しない例も見出された。

このように平泉周辺に「折衷型」作品の現存数が多いことや、平泉周辺地域内では細部に至るまで形式上の共通性が認められることは、中央での新形式が、平泉での菩薩形坐像の典型的な着衣形式として定着し、広く制作されたことを示すものと推測できた。

以上のように、「折衷型」作品群の比較・検討を通じ、前代、あるいは奈良仏師・慶派仏師の典型形式とは異なる新形式が各地に広まる様子を、実作品に即して跡づけることができた。また、本研究で明らかとなった「折衷型」作品群が共有する一定の造像の型の存在は、これらの諸形式が各地で単発的に現れたものではないことを示すと言える。「折衷型」作品群は、現在近畿、四国、伊豆半島、東北などに点在しているが、個別の一地方作としてではなく、中央(都)との関連性を想定できる作品と捉えることができる。京都仏師あるいはその周辺仏師が各地の造像に直接関与したのか、あるいは新形式の影響が各地に広まったのか、その判断は個別に慎重におこなうべきと考えるが、「折衷型」作品群は、今後、中央との影響関係を想定した新たな価値づけをおこなうことができるとともに、遺品の乏しい京都仏師研究を補う一助とすることができるものとする。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

佐々木あすか「平安時代末期の奈良仏師による新形式・新様式の形成過程と一一七〇年代の康慶・運慶 一長岳寺阿弥陀三尊像・円成寺大日如来像・瑞林寺地藏菩薩像の比較を中心に-」『仏教芸術』第2号、査読有、2019年、95-113ページ

6. 研究組織

(1) 研究分担者

なし

(2)研究協力者
なし

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。